

「街道」がつなぐ歴史と文化 リニア時代の宿場まち中津川

岐阜県中津川市長

青山 節 児



1. はじめに

中津川市は、岐阜県の東南端に位置し、東は木曽山脈、南は三河高原に囲まれ、中央を木曽川が流れる豊かな自然に恵まれたまちです。

平成17年2月13日に中津川市、恵那郡坂下町、川上村、加子母村、付知町、福岡町、蛭川村、長野県山口村の合併により新中津川市が誕生しました。東西28km、南北49km、総面積676.45平方キロメートルの岐阜県内で6番目に広い市で、まちのシンボル恵那山をはじめとする山々の懷に抱かれ、長い歴史を歩んできました。



古代は「東山道」、近世は「中山道」「南北街道」を介した様々な交流による街道文化が息づく中津川市には、中山道「中津川宿」「落合宿」「馬籠宿」の3宿があり、山深い木曽路を前にした宿場には多くの人々が滞在し、江戸や京都の都文化が運ばれ、にぎやかな宿場町としての文化をはぐくみ、また、中津川宿より北に向かう南北街道沿線は、日本海文化圏とのつながりと山村文化が色濃く残っています。

明治時代に入ると名古屋まで鉄道（JR中央本線）が敷かれ、また、戦後の車社会を迎えたなかでは国道19号の整備、中央自動車道の開

通などによる交通アクセスの向上や中核工業団地の整備などとあいまって、工業都市として東濃東部の中核的な役割を担ってきました。

街道が交差し、日本のほぼ中央に位置する本市は、それぞれの時代において中央と地方をつなぐ交通結節点としての役割を果たすことでの様々な産業が発展してきました。



木曽地域と裏木曽と呼ばれる本市には、自然度が高く世界的にも希少で貴重な温帯性針葉樹林が広がっており、国は「木曽悠久の森」として、数百年に及ぶ森林の保護に向けた取り組みを進めています。

とりわけ当地域から伐り出された良質なヒノキは伊勢神宮をはじめ、姫路城、明治神宮など数多くの歴史的建造物に利用されており、現在でも20年に1度行われる伊勢神宮の式年遷宮の御用材として提供されています。

江戸時代には街道を人や物、情報が盛んに往来することで、都の芸能文化であった歌舞伎がこの地域にも庶民の娯楽として広まり、自分たちが演じ手となる「地歌舞伎」として現在まで受け継がれてきました。平成22年には岐阜県から「岐阜の宝もの」に認定され、県と連携して地域資源の磨き上げに取り組んでいます。

また、本市は文豪・島崎藤村、日本画家の前田青邨、洋画家の熊谷守一の生誕地としても知

られ、馬籠宿の島崎家跡地に建つ藤村記念館には、代表作「夜明け前」などの作品原稿も展示されています。



2. リニアのまちづくり

2027年にはリニア中央新幹線の開業が予定され、東京～名古屋間が約40分でつながることになります。本市には岐阜県駅が設置されるとともに整備工場を有する中部総合車両基地も設置されます。

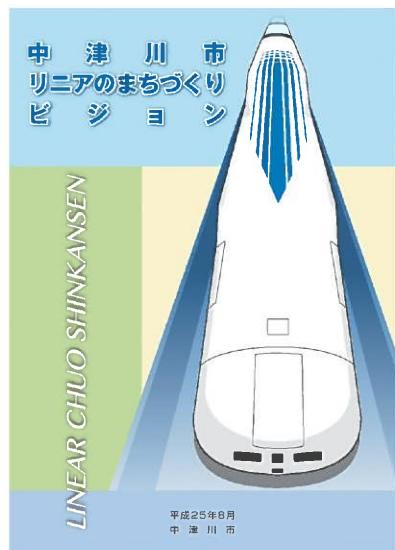
2045年に東京～大阪間の全線が開通すると、中津川と東京、大阪がそれぞれ1時間以内で結ばれることとなります。



リニア中央新幹線は“新たなみち”であり、岐阜県駅は多くの人や物が行き来する新たな交通の結節点として、都市と地方をつなぐ役割と地方の拠点としての役割を併せ持つ現代の宿場まちの核となります。

中津川市では現在、リニア岐阜県駅を中心とした2時間圏内の新たな人の流れの創出と快適な移動環境を確保するため、国や県と連携しリニア岐阜県駅と高速道路、近隣都市間を結ぶアクセス道路の整備を進めています。さらにインバウンド観光を含めた地域の産業振興と活性化のため、宿場町の風情や地歌舞伎、芝居小屋、

森林文化など地域の魅力を活かしたまちづくりにも取り組んでいます。



3. 各種計画・マスタープラン

千載一遇のチャンスであるリニアの開業をまちづくりに活かし、持続的に発展する中津川市を作り上げるため、平成25年8月に本市では「中津川市リニアのまちづくりビジョン」を策定し、リニア時代を見据えたまちづくりの基本的な考え方や施策の方向性を示しました。

また、平成27年3月に「中津川市都市計画マスタープラン」を全面改訂し、既成市街地等への居住の集積や都市機能の集約を図り、既存の都市基盤を活用するとともに、リニアの開通に伴う新たな基盤整備を計画的に進めることとしています。また、生活圏のまとまりや都市機能・土地利用を踏まえた拠点を形成し、公共交通を中心として市内の各拠点を結ぶことで身近な生活圏で暮らせる「多拠点ネットワークによる集約型都市構造」を目指すこととしました。



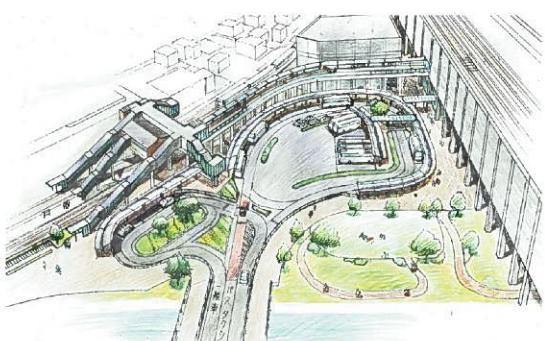
マスタープランにおいては、中津川駅を核とする中心市街地のエリアを本市の顔として中心的な役割を担う「都市拠点」と位置付け、リニア岐阜県駅周辺は「広域交通拠点」として都市拠点との連携・機能分担を図りながら、ともに都市機能を効果的に発揮できるまちづくりを推進します。さらに、「地域生活拠点」、「地区拠点」、「行政・情報・文化拠点」、「観光拠点」等を位置付け、各拠点の機能を適切に分担し、まちのにぎわい創出や観光交流の推進を図ることとしています。

4. リニア岐阜県駅周辺 土地区画整理事業

岐阜県リニア中央新幹線活用戦略研究会基盤整備部会において、平成27年3月に「リニア岐阜県駅周辺整備基本計画」が策定され、リニア岐阜県駅周辺施設の整備に係る全体像や必要とされる個別機能が整理されました。また、平成28年3月に策定された「リニア岐阜県駅周辺整備概略設計」においては、基本計画をもとにリニア岐阜県駅に求められる機能や役割について具体化されています。

基本計画・概略設計におけるリニア岐阜県駅周辺整備の基本方針として、

1. 岐阜県の東の玄関口としての駅・「清流の国ぎふ」を感じさせる駅
 2. コンパクトかつ交通結節機能を重視した駅
 3. 利便性に優れた駅
 4. にぎわいのある駅
- を目指し、駅周辺の各施設等の整備を進めることとしています。



リニア岐阜県駅周辺地区は、中津川市西部の坂本地区の中心部であり、リニア開業に合わせた濃飛横断自動車道及び（仮称）東濃東部都市間連絡道路の整備が予定され、広域の交通結節点としての重要な役割を担う地区となります。駅周辺地区では必要な商業機能をコンパクトに配置し、駅前広場や道路、公園など公共施設の整備改善と宅地の利用増進を図り、計画的かつ良好な市街地を一体的に整備します。

また、その一方で地域の中にはリニア岐阜県駅周辺整備による生活環境の変化も予想され、道路整備等による土地の高低差、地域コミュニティの分断、日照、不整形な残地の発生等の課題も想定されます。

これらの課題を解消するため、土地区画整理事業によりリニア岐阜県駅周辺の公共施設の整備改善と宅地の利用増進を図り、地域の活性化とともに将来にわたって秩序ある便利で暮らしやすいまちづくりを進め、岐阜県の東の玄関口としてふさわしい広域交通拠点を整備していくたいと考えています。

また、リニア岐阜県駅周辺整備やアクセス道路の整備によりまちの利便性を高め、より快適な居住空間を作るとともに、これらを生かした文化・研究機関や新たな分野の企業誘致を進め、若者と女性が働きやすく「住んでみたい、住んでよかった」と思えるまちづくりにも取り組んでいます。

街道が果たしてきた文化や産業などをつなぐ役割を、リニアという“新たなみち”が担い、これを生かすための人づくりやまちづくりを進め、リニア時代の宿場まちとしての発展を目指してまいります。



設計図

A3 S=1:4,000

凡 例
施行地区界
幹線道路・駅前広場
区画道路
特殊道路
公園
河川・水路

